

成果報告書

8 月 8 日から 9 月 3 日（航空機の遅れにより帰国が予定より 2 日程遅れた）までアフリカ医療研究会の一員としてコンゴ民主共和国に渡航し、医療・保健分野の様々な活動を行った。今年度の活動は健康診断・家庭訪問・ワークショップ・現地施設訪問の 4 つに大別される。またそれに先駆けて国内活動として、看護医療学部・藤屋専任講師による国際保健の考え方を学ぶ勉強会や、国際開発、貧困や健康格差などをキーワードに文献の輪読会を進めてきた。これらから得た視点や切り口はプロジェクトを 0 から作り上げていく過程において大きな助けとなった。また、Acadex 小学校において教育と建築の活動を構築してきた SFC 長谷部・松原両研究会と共に渡航前よりそれぞれの活動について理解し合い、お互いが効果的に活動できるように検討を重ねた。

ここからは個々の活動について、その内容とそこから得られた考察について述べる。まず健康診断は 4~12 歳の Acadex 小学校の児童 90 名に対して行った。内容には体力測定も含めた。項目としては身長・体重・視力・垂直跳び・握力・上腕・体温・医学部武林教授による診察・50m 走・幅跳びを行った。今年度は昨年度に比べ項目数を増やすことができた。特に最後の 2 つは体育の授業がないコンゴにおいて非常に喜ばれるものであった。また昨年度の結果をグラフや写真を用いてフィードバックすることができたことも新しい試みであった。子どもたちは興味津々な様子で見えており、これを継続していくことで自分の身体への関心が高まっていくことを期待している。今回このような大規模な健康診断を行うことができたのは本研究会に加え、両研究室員全員の協力のおかげである。そして子どもたちと測定を通じて直に関わり、健康について考えることができたことも大きな収穫であった。また着実に学校保健が根付きつつあるという手ごたえも感じられた。今後は得られたデータを昨年度のものと比較しながら、来年度以降どのようなプロジェクトが組めるのかという視点でも考察を深めていきたい。

次に家庭訪問では 13 件の家庭を訪問し、水・電気・ワクチン・母子保健・蚊の対策・薬品・食事・生活などの項目についてヒアリングを行った。正確な統計データの少ないコンゴについて考えていく際に、自分たちの足で歩き、目で見て、実際に話を聞いたデータはとても貴重であると実感することができた。昨年度に加えた新しい点として、寄生虫や骨折などの疾病に関するものや食事に関する項目がある。これらは昨年度の家庭訪問の結果を踏まえて、より詳細なデータが必要だと感じ追加した。この調査により、現地で本当に必要とされていることは何なのか、またこの地域の生かしていける強みとは何なのかを知ることができた。その例として、出産は病院でするなど母子保健は比較的充実していること、薬局が多数存在しており病気の際に薬を購入できること、国によるワクチン接種が勧められていること、停電してしまうことにより断水することなどがある。そして昨年度と比較してどの程度インフラ等の生活レベルが向上しているのか、などの視点からも生活を考えることができた。これらのデータを基に、世界銀行や国際機関がどのような方針でコ

コンゴ民主共和国キンボンド地区 ACADEX 小学校を拠点とした学部連携保健医療活動

看護医療学部 3 年 坂本のぞみ

ンゴの開発・支援を勧めているのかを知ることにより、その到達状況などを今後考えてみたい。またこの家庭訪問についても教育・建築の両研究会員と共に行うことにより、それぞれの視点からの質問もあり、保健医療だけでは気付けない新しい視点から人々の生活を理解することができ、新しい発見となった。

3つ目の活動であるワークショップは、ルーペや顕微鏡を用いて小さいものを拡大してみることという理解してもらい、目で見ることができない寄生虫による病気を防ぐために手洗いをしようというテーマで行った。内容は昨年と重複するところもあるが、今年度新しく取り入れたこととして、一人ひとり手洗いを実際に行い、どのくらい汚れが落ちているのかを特殊な機械を用いて確認するということがある。これにより子どもたちがただ手の洗い方の指導を受けるだけではなく、実際に自分ではできているのかを確認することができ、足りていないのはどこなのかを知ることにより、手洗いへの関心を高め、より丁寧な手洗いができるようになることを狙いとしている。顕微鏡を初めて覗く児童も多く、熱心にスケッチする様子も見られた。また手を洗う習慣はあるものの、指間や爪などに汚れが目立ち、それを見つけ丁寧に洗い直す姿も見られた。昨年と今年の 2 回のワークショップにより手を洗うことの重要性は浸透してきたように感じられる。来年度以降は新しいワークショップを作り上げていくとともに、手洗いの継続性が保たれるための手段を考えていきたい。

現地施設訪問として、大学医学部や今秋開校予定の医療職養成学校、日本文化センターを訪問した。先の 2 つでは、校舎等を見学しながら行われている教育について話を伺った。関係性を構築することができ、来年度以降見学に加え、学生レベルでの交流を持っていきたいと考えている。日本文化センターでは、長谷部・松原両研究室が今までコンゴにおいて行ってきた活動を紹介するとともに、医学部武林教授・看護医療学部藤屋専任講師による国際保健・公衆衛生についての講義があり、日本語を学ぶコンゴ人たちも興味深く耳を傾けており、その後学生同士でディスカッションを行うことができた。

これら全ての活動は SFC 英語講師サイモン・ベデロ先生、そして寝食を共にしたコンゴ人、日本語を学ぶコンゴ人学生など多くの方の支えがあって成功を収めることができたということを付け加えたい。

以上のような活動を看護医療学部・医学部と長谷部・松原両研究会と共に行うことができたことは非常に貴重な経験となった。特に保健医療を考えていく際に、医療だけでなく教育や建築など他分野からの視点も欠かすことができないという大事なことを学ぶことができた。また交流が狭くなりがちな看護・医学部生にとって他学部生と共に生活をし、プロジェクトを行うことは視野を広く持つという点でも得るものが多かった。今回得られた様々な経験を、これから団員でさらに成熟させ来年度の活動をより充実したものにしていきたいと思う。最後に今回の渡航が自分自身の進路や医療感、価値観などについても考えさせられる契機となり、人間としても大きく成長することができた。

看護医療学部 3 年 坂本のぞみ